

二〇一九年度口語詩句新人賞及び奨励賞推薦

林
桂

〈新人賞〉

● 山田洲作 ●

*

朝

つり輪の円に心が泳いでる

*

旅券は

あざやかな封筒に

*

生きる

藤棚の下のベンチが心地良い
旧友が隣に座る想像をする。

*

さびしさ

曇り車窓から

立体駐車場二階は
蛍光灯をもう灯している

*

梨の後味が消えない

開花していくわたしの歯ブラシ

*

ペンギンが好きだという友人が
よく電話をかけてくる

秋

*

暗い部屋で

冷蔵庫を開けカルピスを飲む
冷蔵庫の光を飲んでみたいだ

* 雑巾絞りしたような
幹が木陰を作り出す

家族三人散歩に来た

* ぼくの知らない

父親の
日帰り手術

鈴の音

* 院内から見た陽射し

ぼくの名が呼ばれるまで

透きとおっていた光

〈評〉

抑制のきいた表現で内省する。自分の短詩の文体を持っている。

● 郡司和斗 ●

* 夏の風うけて顔から滅びゆく

* 永遠のほうの稲妻を胸にしまう

* 蟻ひとつ這いよる星座早見表

* よく笑うおととに雪ふりつもる

* 雪降るたびに睫毛に魚うまれる

* 冬の鹿役の
子がおくを見てる

* 死にたての小鳥の
ようなホツカイロ

* 遠足にコウテイペンギンはいない

* 早逝の一族

春の野を過ぎる

* だぼだぼのたましいを着て
凧あげる

〈評〉

口語の生きた俳句文体である。その世界も清心で清潔感がある。

● 桜望子 ●

* 若者は明るく生きてゆくべきだ
こんな世界でどうやって

紫陽花

* もう誰も許したくない
透明なビニール傘に
貼り付く葉脈

* 紫陽花は幾何学めいて
詩不用論
話す後輩の手の甲あたたか

* 水蜜桃

傷付きやすい魂に
触れるかのように
丸ごと齧る

*
夕焼けの
校舎はアクロポリスめき
相談室を足早に出る

*
葉の枯れる香り
わずかにあるような
冬は寂しい顔をしてみる

*
ジムノペティ脳内再生する
母の遺影を抱けば銀細工 冷たい

*
誰のための鎮魂歌だろう
降る雪は
あまりに白く骨の色して

*
冬空にその身晒せば
「あ、これがさみしさ」
名前のわからない鳥

*
街の奥に夕焼け
叶わなかった夢ばかり
思い出してる
カレーの匂い

〈評〉

短歌文体によって繊細な内面を描出する。抒情も美しく高い。

〈奨励賞〉

●合川秋穂●

* 駅と駅の間を歩く　ここだつて町

* 海に降る雪　主文のない告白文

* 制服のまま寝る　寒天は影も透明

* 鳥も歩く　翼では行けない場所へ

* 自分の部屋ないまま育ち

* 夜を知らない

* 塩舐めて海になる　体は眠っている

* 放たれてまだ水平な紙飛行機

* 打ち上げられて

* まだ透明な
海月たち

* くるぶしまでしか
海を知らない

* ピンで街を

* 刺さないと留められない地図

〈評〉

俳句文体の「切れ」のあるイメージで、若い孤独な内面を描く。

● 鈴木四季 ●

* 春眠よ

* 兄が誘拐される前

* 菜の花の茎三千の断面図

* 鉄仙のひらいてひらききつて悪

* 芍薬の海馬を鈍器と思うまで

* レモン水

兄がときおり自慰をして

* タチアオイ

猫が轆かれた方を向く

* ドガの画集に落書きをした

男子たちを秋の端まで

おいつめる

* ショベルカー項垂れたまま

年を越す

* レポートを出して駅まで歩く夜の

おそらくあれは二つめの月

* 冬の星かくれて

誰か居る夜道

〈評〉

既存の俳句文体を残しつつ、新たな文体の展開へ向かっている。

● 亀山こうき ●

* 爆心地から一キロの猫の恋

* クロツカス医師の優しさが痛い

* 履歴書に小さな×をされて秋

柿を剥く妻は私にわからない

*

子の骨は軽くて紋白蝶は飛ぶ

*

夜の雪に俺には兄がいたと知る

*

雪しづり

祖父の愛した Zippo の火

*

病院しかしらない

五年の命終えて雪

*

三寒四温子の骨しかない墓

*

死に顔が俺に似ていて冬雲雀

〈評〉

虚実是不明ながら、自身の境涯を綴り続けた一年には魅了される。

● 門野あおい ●

*

だって足が濡れて

しまったんだもの

*

このきれいなつつみ紙の

チョコレート

毎にかじって

そうして春がきたらいい

*

喪中

ただあたらしく口紅を買う

*

春はさかり、

花を摘むごとく

君の骨をひろう

* 熱の下がつたうれしさ
桃色のマニキュアを塗る

* 月の光しずかに
いつかは焼かれる躰に

* まだいとけない顔、
焼くために紅をさされる

* 子どもことごと
春がきますよ

* 世界がほろびる前の日
猫の爪を切つてやる

* ひなげしまだ燃えて夕日

〈評〉

独特の独白体は、自らを癒やすために書いた切実さが感じられる。

* ●長谷川 柊香 ●

* 林檎は甘煮されて透き通って従順

* 夏季講習糖の模型の軋む音

* 繰り返す朝

* 蒲団から出て「私」着る

* 上向くといつも雪片右回り

* 街灯に照らされ牡丹雪となる

* 足畳む吾の

ユニツトバスに寒明ける

*

きしきしと

夜を鳴くキャベツ刻み飽き

*

何度でも人に生まれて冬銀河

*

ベランダで春雨を指揮していたの

*

月光は故郷への道タオル干す

〈評〉

俳句の古い表現が残るが、感性が良さく、後半に急速に向上した。

〈選考メモ〉

1・十編抄出という条件から適合の年間佳作十編以上の作者から、更に林が十編以上推薦している作者を選び出した。

2・その中から、年間三十六作品以上の投稿という条件を満たしていない者を除く。

3・その中から、八月から二月までの総評で林が一度でも取り上げたことのある作者だけを残す。

4・佳作数（林推薦）、総評数、入選率の三者を総合したランキングをつくる。

5・ここで三十五歳以下という条件に外れる（十年未満の経験者がどうか判断できないので判別できる基準を適応）作者、及び奨学生を除く。

6・残った二十人の作品を改めて読み、上位者八名を選出した。

〈感想〉

・十代に想像以上の優れた作者がいることに改めて気がついた。二十名の中にも、有本たける（十六歳）、はすた（十七歳）二名が残っていた。最初の奨学生を選出するときには、この層の作者が薄かったので、投稿者の層が少しずつ広がっていることを実感した次第。